
夢見姫 墮落の少女

白山菊理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢見姫 墮落の少女

【Nコード】

N3721C

【作者名】

白山菊理

【あらすじ】

あの日から永遠と眠り続ける少女と夢に潜る力をもつ少女が出会う時、運命は優しく残酷に廻り始める。

序章　哀愁

序章　哀愁

「私が世界を捨てたんじゃない・・・世界が私を捨てたの・・・」
少女は道を見失っていた。完全に・・・暗き闇はどこまでも続く。一歩、足を踏み出したところで目が覚めた。頬には涙が伝っていた。もう一度寝ようかと目を瞑る。しかし、母に早く起きると急かされた。毎日の光景。傍から見れば、微笑ましいとか言う人もいるかもしれない。しかし、少女にとって毎日とは退屈の繰り返しであり、それ以上、それ以下でもない。ただ、ひたすらに退屈なのだ。いつものように通学路を通り、登校し、いつものように教室に入り席に座る。「おはよう。」などと声をかけてくれる友達はいない。時々、言ってくれる人もいるが、それは気が向いたから言っている、ただ、それだけの事。しかし、これも少女にとってはいつもの・・・退屈な光景なのだ・・・。

〈第1夜 空蟬〉

少女・・・歌夜は、そんなに明るい子ではなかった。かといって暗いわけではない。周りから特別、無視されているとか、いじめられているとか、そういったことは一切なかった。しかし歌夜は誰とも口を聞かず、一人、席に座ったままだった。

せめて、このクラスで仲の良い子が来るまでは・・・

と、思いながら退屈な時を一秒刻みで過ごしていた。

歌夜は高校一年生である。入学して間もない頃は、今より明るく振舞った。中学校時代の自分を変え新しい高校生活を始めたいと思ったのだ。そのため級長も引き受けたりした・・・が、それは無駄な努力でしかなかった。歌夜は人と接することに慣れておらず、周りの話題にもついていけなかったのだ。流行には、さして興味が無く、服装や立ち振る舞いもしっかりしており校則は絶対に破らない、広い意味での‘今時の子’から少し離れた存在・・・そんな子だった。歌夜は初めのうち、周りの人と仲良くなりたいたいと思って行動していたが、今は違う。周りの人間など興味が無く疎ましいとさえ思っていた。しかし、その反面では本当の友達を求めている。自分の中で多くの感情が交錯する・・・歌夜にはどれが自分の本心なのか分からなくなっていた・・・。

昼休み。歌夜にとって一番退屈な時間である。仲の良い子がいるグループでいつも食事をするのだが、その時も誰とも話さず、一人黙々と食べている状態・・・つまり一人で居ても変わらない状態なのだ。歌夜はそんな状態が嫌だったが、‘一人よりまし’と自分に言い聞かせ、この状況に半年近く耐えてきた。これからずっとこれ

が続く・・・はずだった。

「詩乃、一緒にお昼食べよう。」

いつもどおりの科白。友達・・・詩乃の答えは決まっているはずだった。しかし・・・

「ごめんね。今日は、食堂で皆で食べるの。」

詩乃は財布を手に取り、急いで教室から出て行った。歌夜は一人、教室に取り残された。歌夜は詩乃のいった何気ない一言が、自分の中で、怒り、悲しみ、といった感情に変化していくのを感じていた。

‘皆’の中に私は含まれていないの・・・？一緒にいたのに・・・？

涙が頬を伝う。

皆にとつての私の存在って・・・一体・・・？居ても居なくても・・・

それ以上は考えたくなかった。色々な不満から叫び声をあげそうになった。

そうなる前に・・・

歌夜は涙を拭い、鞆を持って教室を飛び出した。

く第2夜 彼岸く

家に着いた時、家には誰も居なかった。

もちろん人が誰も居ないなという意味もあるが、彼女の心の内を聞いてくれる人が誰もいないという意味もある。

両親に自分の気持ちを素直に話してみても

「あなただけが、そんな悩みを持っているんじゃないの。みんな一緒なの。」

の一言で片付けられてしまうのが落ちなのだ。歌夜はこの言葉を聞くのが一番嫌いだった。

同じ悩みであつても一人一人感じ方は違う！！

心の中では、そう叫んでいたが、口に出せるはずもなく、出かかった言葉を心の奥底に沈める。

するとそれが、やり場の無い不快な気持ちとなり、心に募る。

歌夜にとって親に助言を求めるなど、悪循環のきっかけでしかなかった。

歌夜は自分の部屋に入り鍵を閉めた。机の傍に鞆を掛ける。

その時、机の上のペン立てにあるカッターナイフが目についた。

小刻みに震える手で、それを掴む。

カチカチカチカチ・・・・・・

刃を出す音だけが部屋に響いた。

そっと自分の手首にあててみる。今まで堪えていた涙が溢れ出す。

私が死んだら・・・どうなるんだろう・・・

そんな考えが頭を過る。しかし、答えは見えていた。

どうにもならない。変わらない・・・何も・・・そう何も・・・

一つ、また一つと涙が零れる。

私は・・・最初から・・・存在していないようなものだもの・・・

歌夜は出来るだけ冷静に考えた。刃が血で染まる前に。今の状況をつくった原因を。

第一に自分のクラス。興味なき人々のために自分が死ぬことなど馬鹿馬鹿しく思えた。

歌夜はカッターの刃をしまった。

第二に解決方法。もちろん自分の感情のだ。そして、おかれた状況も。

しかし、自分一人では答えが見つからず、かといって相談にのってくれる相手もない。

それが第二の原因だった。

歌夜は思い出す。今朝の夢を・・・。

暗き闇が、何処までも続き、道が無く、一步踏み出したところで目が覚める・・・。今朝見た夢は歌夜がおかれた状況、そして、これからを如実に表していた。

歌夜は机の上に置いてある小ビンを手にとった。中身は睡眠薬。歌夜は、それを大量に口にふくみ、無理矢理飲み込んだ。

視界がぼやけていく。歌夜は倒れるようにベットに横になり、深い眠りについた。

このまま目が覚めなければいいのに・・・

そんなことを思いながら・・・。

く第3夜 夢路く

目が覚めた時、そこには見知らぬ光景が広がっていた。

いや、知っていたのかもしれない。ずっと昔から、自分はそこにいた気がした。

枕元に手をやると、鈴のようなものが手に触れた。懐かしい感触。しかし、いつもどおりの気がする。

これで、舞を舞うんだっけ・・・？

その時だった。

「巫女様く。」

外から声がした。歌夜を呼ぶ声。歌夜は簾を上げ、外に出た。目の前に小さな少女が立っていた。

「おはよう、沙苗。」

口から自然と言葉が出た。まるで自分の言葉ではないようだった。少女・・・沙苗から視線を逸らし、顔をあげて改めて周りを見渡した。そこには、とても美しいとは言えない光景が広がっていた。

木々は枯れ果て、畑の土は水分を失いひび割れている。行き場を失った動物の死骸。不作のため着物の下から肋が見える村人達・・・。

「行こう。巫女様。『龍神の滝』の舞台へ！」

歌夜は思い出した。そう、全ては雨乞いのために。この、悪しき状況を取り除くために。

歌夜は巫女としての一步を踏み出した。

滝には、すでに舞台が用意され、村人達が集まり始めていた。歌夜は急いで襦を行った。穢れを祓い、神聖な儀へと赴くために。歌夜は舞台へと上がった。舞台の後ろは、水を失い滝とは言えない様な滝だった。

私は失った水を取り戻すために・・・

「高天原に坐し坐して天と地に御働きを現し給う龍王は・・・」

歌夜は祝詞を唱え始めた。と、同時に神楽を舞う。鈴の音が静寂の中響きわたる。

「・・・龍王神なる尊みを敬いて・・・」

これが私の与えられた役・・・

「愚かなる心の数々を戒め給いて・・・」

これが私生きがい

「萬物の病災も立所に祓い清め給い・・・」

鈴の音と共に舞は激しさを増す。

「祈願奉ることの由をきこしめて・・・」

私は・・・私は・・・！

「六根の内に念じ申す大願を成就なさし給えと恐み恐み白す」

私はここに存在している！！

舞は終わり、静寂の中に鈴の余韻だけが残っていた。

く第4夜 人柱く

‘雨乞いの儀’を行ってから一週間が経った。

が、一向に雨は降らず、それといった気配もなかった。その間も、村人達の疲労や哀しみといった負の感情は日に日に増し、ピークに達していた。

その感情は巫女である歌夜に向けられた。歌夜は応じる。

「もし、後一週間程、雨が降らぬ場合は、別のかたちで儀を行いましょう。」

村人達の心には、既に一週間も待てる余裕は無くなっていた。

ある日、村人達は歌夜に内緒で密かに集まり、今後のことを話し合った。

食料の事、年貢の事、土地の事、そして雨乞いの儀について……。

「どうして巫女様が儀式を行ってくださっても雨が降らないのだろうか？」

「あれから、ますます日差しが強くなっているように見えますがな……。」

「まさか、龍神様は巫女様を望んでおいでなのでは……。」

「き……きつとそうじゃ！龍神様は巫女様を差し出すように言うておられるのじゃ……！」

村人達は何かに突き動かされるよう、巫女を龍神に差し出すことを

決めた。

‘差し出す’という事は、つまり‘生け贄’にするという事だ。そして次の日、村人達の仲の代表何人かが、歌夜に事情説明と説得をしに行った。たとえ説得に応じなくても、村人達は歌夜を殺め、生け贄にしようと決めていた。

*

「私に・・・贄となれ、ということですね・・・？」

「はっ・・・はい。そ・・・率直に申し上げますと・・・」

歌夜には分かっていた。

説得に来た村人の懷に短刀が仕込んであり、自分はどっちみち死ななければならないということが・・・。

ならば・・・

歌夜は目を閉じ深呼吸をすると立ち上がった。

そして村人達に背を向け祭壇に向かって歩き出した。

「巫女様・・・？」

祭壇に置いてある鏡の後ろから桐の細長い箱を取り出す。箱には何重にも朱い糸が巻いてあった。

その糸を、村人達が見守る中、無言で解いてゆく。

糸が解き終わり、歌夜は箱の蓋を開けた。

中に入っていたのは、立派な装飾を施した短刀だった。
鞘には、菊、彼岸花といった模様がはいっていた。

「これは巫女が自害する時のみに使う短刀です。」

歌夜は背を向けたまま村人に語りかけた。

「はっ……はぁ……それで返事の方は……」

村人の額には冷や汗が流れていた。

「承りました。」

歌夜は俯いたまま答えた。

この瞬間、歌夜が生け贄となることが決まった。否、最初から決まっていたのだが……。

「日は……？」

歌夜は顔をあげ落ち着いた声で問うた。

「今夜……、龍神の滝で。」

村人はそれだけ告げて帰っていった。

「これも皆のため……」

歌夜は自分の心の中で思っていた事を声に出して言った。

しかし、心の奥底で、もう一つ別の感情が自分を突き動かしているのを歌夜は感じていた。

そして今、歌夜は龍神の滝にいる。歌夜の最期の舞台……。

村人が見守る中、歌夜は短刀を鞘から抜き、自分の喉に突きつけた。

ああ、私は……

短刀を思いきり自分の喉に突き刺す。生温かい血が自分の手を伝い、赤い花となり地面にさく。遠ざかる意識の中、歌夜は思った。

私は……死を……望んでいたんだ……

こうして巫女としての歌夜は死んだ。

く第6夜 夢占く

「マダム・・・マダム・リデル・・・」

マダム・リデルこと、リデル・ブロワは誰かに呼ばれる声で目を覚めました。シエスタの途中で・・・。

「そろそろ店を開けましょう。」

「そうね、そうだったわね。」

リデルは木の看板を手を取った。

そこには見慣れぬ文字で、‘占いの館 フロレアル’と書いてあった。いや、いつも見慣れている文字だ。

その看板を使用人のジエームズに渡す。

リデルは夫が亡くなってから13年間、この店をやっている。星占術やタロットカードを使い、人の悩みを解決していく・・・それが彼女の仕事だった。

ジエームズが館の扉を開けると、そこには既に黒山の人だかりが出来ていた。

「さあ、始めましょうか！！」

そう言つてリデルは気合を入れ直した。

1時半から始めた店は、閉める時には7時半を過ぎていた。

リデルは来た人の悩みはその日のうちに聞くことにしていた。自分の時間を削つても人の役に立つことをリデルは生きがいにしていったのだ。

最後の客を見送り、扉の鍵を閉めたその時だった。

ドンドンドンドン

激しく扉が叩かれる音は、尋常ではない。リデルは恐る恐る扉を開けた。

キイイイ……………

そこにはずぶ濡れの女が立っていた。外は雨が降り、雷鳴が轟いている。傘も差さずに来たのだろうか……。

「さあ、中に入って。」

リデルは女を中に招き入れ、ソファーに座らせ、タオルを渡した。テーブルの上にジェームズが温かい紅茶を置いた。女は震えている。よく見ると体中、痣だらけだった。

「貴女、名前は？」

女はちらつとジェームズの方を見た。

「ジェームズ、悪いけど席をはずして頂戴。」

女は人に聞かれたくない話があるらしい。ジェームズは無言で立ち去った。

「シルフィンといいます……………」

女……シルフィンはようやく口を開いた。

「実は、あることを占ってほしくて・・・ここに参りましたの。」

貴族出身なのか、シルフィンの話し方はとても上品だった。

「夫を・・・どのように殺したら良いでしょうか？」

く第7夜 悪夢く

「・・・・・・・・。」

リデルは言葉を失った。

やはり尋常ではなかった・・・

そんなことを思っていた。

私は本気なんです。

シルフィンの目がそう訴えているように見えた。

「理由は何なの？」

リデルは出来る限り落ち着いた声で聞いた。
その声とは逆に背中には冷や汗が流れていた。

「夫に暴力をふるわれていますの。」

それは見れば一目瞭然だった。痣だけではなく、服もところどころ破れている。

「酒癖が悪くて・・・それ以前に私の事が気に食わないらしくて・・・。」

「別れれば良いのでは・・・？」

リデルの問いに、シルフィンはため息をついた。

「それが出来れば苦勞はしませんわ。」

そう言つてシルフィンは、また深いため息をついた。

「私と夫の結婚は家が決めた事でして・・・もし、別れでもしたら、私は家を追い出され、行く所が無くなつてしまいますわ・・・。」

シルフィンはリデルを見つめた。哀しみを湛える・・・そんな目だった。

「貴女の夫殺しを手伝ふことは・・・出来ません。」

リデルは軽く目を閉じて言つた。彼女の目を見ることが出来なかったのだ。

「ただ・・・貴女の夫の余命を占う事ならできます。・・・それだけでもよろしいでしょうか？」

シルフィンは頷いた。

リデルは早速、占いを始めた。

方法はタロットカード。手順に従いカードを並べていく。カードを3枚並べ、左から順にめくる。最後の1枚をめくり終えた時、リデルは目を見開き、悲鳴に近い声をあげた。

「いや・・・うそ・・・こんなはず・・・。」

出たカードは、‘運命の輪’の逆位置、‘恋人’の逆位置、‘死神’

の正位置。

「それで夫の余命は・・・？」

死神のカードを見ながらシルフィンが尋ねた。

「そう長くはないでしょう・・・彼は運命により、貴女が手を出さずとも・・・」

「わかりましたわ。どうもありがとうございます。」

シルフィンは笑顔で扉を開けて出ていった。笑い声を上げながら・・・その姿はまるで悪魔のようであった。リデルはその姿を見送りながら、

私の余命も短いのではないか・・・

そんなことを考えていた。

その事を占う勇氣は、今のリデルには無かった。

この出来事から2週間後、原因不明の伝染病が流行し、それによりシルフィンの夫は命を落とすこととなる。

～第8夜 原因～

‘原因不明’という言葉は人々の心に恐怖と不安を生み出す。原因がわからないということは、解決策も無いということ。

何も出来ず、解決策も見つからないまま伝染病は日に日に広がっていった。

人々は原因を求め、恐怖から原因をでっちあげた。

これは悪魔の仕業だ！！

そして、目に見えぬ悪魔は、後に目に見えるものとなった。

人々はその名を‘魔女’と呼んだ。

原因不明の伝染病に終止符を打つため、その矛先は魔女に一番近い、女性に向けられた。

中でも占い師は、魔女の中で重要な位置にいとされ、国中の占い師が捕まり拷問で自白を要求され処刑された。

やがて拷問は廃止されたが、無理矢理、自白を要求し処刑する方法は変わらなかった。

狭い部屋で魔女か否かの取調べは行われていた。

その部屋に続く廊下には‘魔女’と呼ばれた人々が“裁きの時”を待っていた。当然、その中にはリデルもいた。また一人、また一人と部屋に呼ばれ裁かれていく。誰も戻ってこないところを見ると、皆、処刑される運命なのだろう。

リデルの前の人が部屋に呼ばれ席を立った。彼女は俯いたまま、静かに部屋に入っていた。

パタン・・・

扉の閉まる音だけが狭い廊下に響く。部屋の中から話し声が聞こえてきた。

「名前は？」

「リア・ドロシーです。」

「神は信じますか？」

「・・・いいえ。」

「ほう、信じない？貴女は悪魔に魂を売った人間ですね？」

「いいえ！そんなことはありません！！」

「嘘をつきましたね？神を信じているのなら最初の質問で、はい、と言うつでしょ？」

「でも・・・私は・・・」

「第一、神の元にあるのなら嘘はつけないはず・・・つまり貴女は魔女ですね？」

「・・・はい。」

彼女は何を言っても無駄だと、聞き入れてもらえないと思ったのか、魔女であることを認めた。

いや、認めざるおえなかったと言った方が正しいだろう。

「ならば生かしておく訳にはいきません。」

彼女はすぐに火あぶりの刑を命じられ、処刑台のある広場に連れて行かれた。

く第9夜 介入く

この後、リデルも部屋に呼ばれ、理不尽な取調べが行われた。
取調べを行っていたのは神父だった。

「貴女は神を信じていますか？」

「・・・はい。」

「では神と対なる悪魔の存在も信じるのですね？」

「いいえ。」

「・・・という事は神の存在を否定しているのも同じ。」

「そんな！！それは違います！」

「もはや言い訳は無用・・・貴女は13年前、夫を殺しその魂と引き換えに悪魔から‘力’を貰った。そして占い師と言う立場を利用しシルフィン夫人の夫を殺し、新たな力を手に入れようとした・・・これは事実です。」

「嘘です！！私はそんな事していません！断じてそんな事は！！！」

「言い訳は無用と言ったはずです。火あぶりの刑に処します。おい、お前たち、この魔女を連行しろ！」

神父は強引にリデルを魔女にし、処刑を命じた。
リデルは広場に連れて行かれ木製の十字架に掛けられた。

足元には油のかかった木材が積んであった。同じように十字架に掛けられた人は、およそ40人・・・その一人一人に松明を持った神父がつく。

一人の神父が右手を挙げた。それを合図に神父たちが一斉に点火する・・・その時だった。

「そこまでよ!!」

全ての時が止まった。

リデルは顔をあげた。静寂の中に響くその声は力強く、リデルからすれば異国の言葉であったが、リデルは何故か懐かしささえ感じていた。

「迎えに来たわ・・・四条歌夜!!」

く第10夜 浮世く

歌夜の異変に最初に気づいたのは母だった。

夕食時、部屋のドアをノックし、声をかけたが、返事が無い。嫌な予感がする。

母はスペアキーを使って恐る恐る部屋に入った。

電気もついておらず部屋の中は暗い。母は電気をつけ、そして驚愕した。目の前には、散乱した睡眠薬、横たわり深い眠りについた自分の娘……。

母は慌てて駆け寄り歌夜を抱え起こし、何回も名前を呼んだ。だが返事はない。……が、脈はあるし、呼吸もしている。歌夜はすぐに病院に運ばれた。

歌夜はそれから、その病院で1年間眠り続けた。

その間、歌夜の色々な検査が行われた。しかし、どこにも異常は無い。ただ眠り続けているだけ。いつ目覚めるかは、分からない。それが結果だった。

母は精神を病んでしまい、夫を殺して自殺してしまった。

引き取り手の無い歌夜は、山奥の研究所に移され、そこで更に2年間眠り続けた。

歌夜が眠り始めてから、今日でちょうど3年目。この日、研究所に一人の少女がやってきた。

髪は短く、背は低いが、15〜16歳くらいの年格好である。

研究所の廊下を歩く少女に一人の研究員が声をかけた。

「お待ちしていました。夢見沢弥娜さんですよね？」

「ええ……貴方が連絡をくれた山下聡さんですか？」

「はい。例の少女はこっちです。」

二人は廊下を曲がり、少女のいる部屋に向かった。扉の前に立った、その時……

来ナイデ……邪魔シナイデ……

弥娜の頭の中に強烈な念波が伝わってきた。弥娜はその場に手を付いた。

「大丈夫ですか?!」

山下は突然のことに驚いた様子だった。

「大丈夫です。少し立ちくらみがしただけですから。」

弥娜は心配する山下をよそに自らの手で扉を開けた。

部屋の中にあつたのは、弥娜が今まで見たことも無い機械や大量の書類だった。

そして部屋を中心の天蓋付きのベットに例の少女は眠っていた。

「この人が……四条歌夜?」

「ええ、そうです。」

答えたのは女性だった。気がつくと、その女性は弥娜の後ろに立っていた。

「申し遅れました……私がここの研究長のゾフィ・ウィリアムで

す。
」

「夢見沢弥娜です。宜しくお願いします。」

弥娜は軽く頭を下げた。そのまま横目で歌夜を見る。歌夜はちょうど寝返りをうつたところだった。

〈第11夜 研究〉

弥娜は更に奥の部屋に通された。そこは、小さな応接間だった。席につくなり、ゾフィに写真を渡された。

そこに写っていたのは、真つ赤な雨の降る中に、首から血を流しながら眠る歌夜の写真だった。

「これは・・・？」

「この研究所で撮影されたものです。」

ゾフィは落ち着いた声で言ったが、弥娜にはとても信じられなかった。

「室内なのに何故、雨が・・・それに、首から出血なんて普通なら・・・」

「一種のポルターガイストです。」

「えっ？」

ますます信じられなかった驚きの表情を浮かべる弥娜をよそにゾフィはさらに説明を続けた。

「これは見たとおりただの雨ではありません。」

「まさか・・・血ですか？」

「その通りです。この写真は今から1年前に撮影されたものです。」

この血は約一日降り続けました。それに、首から流れている血もポルターガイストです。彼女はあの通り生きていますから。」

「あの・・・他にもあつたんですか？こついった現象が・・・」

「ええ、この二日後、研究所内に今度は普通の雨が降り続け水びだしになりました。だから貴女を呼んだんです。」

ゾフィは今よりも更に真剣な目つきで話を続けた。研究に全てを捧げる、そんな人の目だった。

「このポルターガイストは夢から来るものだというのが私たちの推測です。」

「つまり・・・それは・・・」

「そうです。貴女の“夢に潜る力”が必要なんです。」

「!?!」

〈第12夜 決断〉

弥娜の家、夢見沢一族は代々、‘夢占’や‘予知夢’、‘夢潜り’などを行い影ながら人々を支えてきた。

一族には昔からの掟がある。それは“自ら名のるべからず、必要とされしとき赴け”というものだった。

普段は普通の人々と同じ生活を送り、必要となった時は人々のために動けという意味だ。

しかし、ここ何十年も“夢見の力”は必要とされていなかった。

弥娜にとって、この科学技術の発達した時代に自分が必要とされるなど、覚悟はしていたが、意外なことだった。

「貴女に夢に潜ってもらい、どんな夢を見ているか、見てきてもらいたいです。もしかしたら眠り続ける原因がわかるかも知れない。」

「でも・・・彼女はそれを嫌がっているんですよ？」

「何ですって?!」

「ここに来た時、『来ナイデ・・・邪魔シナイデ・・・』っていう念波が伝わってきて・・・」

その時、応接間の扉が勢いよく開いた。そして、弥娜のみたことの無い男性が入ってきた。

「だったら、夢を壊しまえばいいんじゃないか?」

「岩乃・・・聞いていたの?」

「ああ。彼女は夢の中に誰かが入ってくるのを嫌がってる。だった
ら、その小娘が彼女の夢に潜って、彼女の夢を壊せばシヨックで
目覚めるだろうよ。」

岩乃とよばれた男は弥娜を睨みながらそう言った。

「夢を壊すなど、一族の掟に反します!!」

弥娜も負けてはいなかった。岩乃を強く睨み返す。

「ふん。目覚めるならいいだろうが。ケツ、これだからガキは。」

「やめなさい、岩乃。でないと・・・」

「はいはい。研究長。分かりましたよ。でないと、クビにされちま
いますからね。」

そう言つて岩乃は部屋を出ていった。

「ごめんなさいね・・・でも私たちは、貴女の一族の掟に反する事
をさせるつもりは無いわ。」

ゾフィは優しく弥娜の肩をたたいた。

「どう？協力してくれるかしら？」

弥娜はコクンと頷いた。弥娜の目にはまだ、不安の色が浮かんでいた。

「今日は、潜れるかしら？」

「いえ。今日はちょっと・・・無理です。明日なら・・・。それに弟が待ってると思うんで今日は帰らせてもらえませんか？」

〈第13夜 異常〉

弥娜はホテルの一室に居た。このホテルは研究所が手配してくれたものだ。それなりに高級な部屋であるが、代金は研究所が負担している。

弥娜はベットに座り、そして、ため息をついた。

不便な暮らしではないのだが、弥娜は何かが満たされていなかった。

「姉ちゃん……どうしたの？」

「尚樹……」

浮かない顔の弥娜に、弟の尚樹が声をかけた。

尚樹は、まだ小学五年生である。そして、‘夢見の力’を持っていない。

本来、‘夢見の力’というものは夢見沢一族の女のみが継承するものであり、男にはその力は与えられないのだ。

「何でもないの……大丈夫。」

心配そうな顔をする尚樹の頭を撫でながら弥娜は答えた。

「姉ちゃん、いつもそうやって無理するんだから。俺に隠さなくてもいい……言ってくれよ！俺も姉ちゃんの力になりたいんだよ！」

目を涙で潤ませながら自分を心配してくれる尚樹を弥娜は優しく抱きしめた。

「尚樹は・・・友達とか先生とかと離れちゃって寂しい？」

「うん・・・少しだけ・・・」

「帰りたい？」

「ううん。姉ちゃんと一緒にじゃなきゃ嫌だ。」

「それは無理よ・・・。」

「じゃあ俺もここに残る。」

尚樹の返答を聞きたびに、弥娜の目も潤んでいった。

「私は・・・私はね尚樹が幸せならそれでいいの。」

「俺も姉ちゃんが幸せならそれでいい。だから・・・そんな悲しそうな顔はしないでほしいんだ。」

「・・・ごめんね。心配かけちゃって・・・」

弥娜は笑顔でこたえてみせた。尚樹は少し安心したようだった。

・・・と、その時、弥娜の携帯電話が鳴った。

「はい、もしもし。」

「弥娜さんですか？山下です。」

電話のむこうの山下は慌てている様子だった。

「どうかしたんですか？」

「それが、またポルターガイストなんです！」

「！！！！」

「歌夜の体の周りの気温が異常に高くて・・・それに煙も！」

「煙？！」

「ですから、すぐ来て夢に潜ってもらいたいんです！」

「わかりました・・・。すぐに行きます。」

そう言って弥娜は電話をきった。すぐに支度を始める。

「姉ちゃん・・・」

「大丈夫。すぐに戻るから。」

心配する尚樹を残し、弥娜は部屋を後にした。

く第14夜 善悪く

「失礼します。」

「弥娜さん・・・早く！ここから歌夜の傍にいけます！」

研究所に着いた時、その室内は、山下の言うとおり異常といえるほど気温が高かった。おまけに辺り一面、煙が充満し前が見えない状態だった。

そんな中、山下に手を引かれ弥娜は歌夜の傍までやってきた。そこには既にゾフィが立っていた。

「良かった。来てくれたのね。今、夢に潜ればポルターガイストの原因も分かるかもしれない！弥娜さんも潜って頂戴！」

弥娜はゾフィに言われるままに、夢に潜るため歌夜の手を両手でしっかりと握り目を閉じた・・・。

*

目を開けた時、風景は異国の石造りの広場に変わっていた。何故かその広場にはたくさんの人が集まっていた。

しかし誰も突然現れた弥娜の事を気にしている者は居なかった。試しに人の顔の前に手を出してヒラヒラと振ってみたが、なんの反応も示さない。

ふん。見えてないんだ

その時、人々が急にざわめき始めた。皆、広場の中心を見ている。弥娜もつられて、その方向を見た。

そこには十字架に掛けられた十数人の女性と松明を持った神父らしき人がいた。その中で、十字架に掛けられた一人の女性が他の人と違う光を放っている様に弥娜には見えた。

まさか・・・あの人が・・・

一人の神父が手を挙げ、松明の火が十字架に掛けられた人の足元にある木材に点火される瞬間、弥娜はその女性と目が合った。

あの人は私が見えてる・・・だったら!!

「そこまでよ!!!」

全ての時が止まった。

「迎えに来たわ・・・四条歌夜!!!!」

「わ・・・私？わたしを・・・？」

彼女が言葉を発した瞬間、周りの風景にヒビが入り、硝子のように砕け散った。

そして暗闇の中に弥娜とその女性だけが残された。

「わたし・・・“カヨ”っていう名前なの？・・・ここはどこ・・・ウツ！」

何処からか飛んできたナイフが弥娜の横をすり抜け、女性の胸を貫いた。そして女性も硝子のように砕け散った。

一人残された弥娜の後ろで足音がした。

「言っただはずよね・・・“邪魔シナイデ・・・”って・・・」

その足音は少しずつ弥娜の方へ近づいてきた。

く第15夜 邂逅く

「誰？貴女は誰なの？」

目の前に現れたのは巫女装束を纏った少女だった。

「私は伽代・・・歌夜の心から生まれし“カヨ”の一人。」

「どういうこと・・・貴女は歌夜じゃないの？」

「私は歌夜であつて歌夜でなきもの。歌夜の理想の実体化。伽代の名を借りし一つの存在。」

伽代と名乗った少女は淡々と答えた。弥娜は背筋に寒気を感じた。

「何故、今の人を殺したの？」

「それは“カヨ”たち全ての望み、掟。貴女の一族にも掟があるようにね・・・。」

「なぜ・・・なぜ知ってるの・・・？」

「貴女の名は夢見沢弥娜。夢への介入者でしょ？眠っていても私は全て見えてるわ。歌夜が今、研究所に居る事も、両親が死んだ事も・・・私の世界を壊そうとする人がいることもね！」

「・・・・・・・・・・」

「貴女は介入するだけで人の世界を壊さないって分かってるわ。だから今のところ危害は加えない。でも私はこの世界で生きてるの。だから邪魔しないで。また介入するつもりならあの男のようになるわよ?」

「それってどういう・・・」

弥娜はその瞬間、意識が遠のき、夢から追い出された。

*

「弥娜さん！起きて！！弥娜さん！！！」

ゾフィに呼ばれて目を覚ました。充滿していた煙は跡形もなく消え、気温も、いつもの研究所に戻っていた。

「私・・・何分くらいこうしていたんですか?」

「30分くらいですよ。」

弥娜の質問に傍に居る山下が答える。

「何か分かりました?」

「はい。彼女は彼女の理想のカタチで何人も存在していて・・・皆、死を願ってるんですよ。眠っていても周りは見えてるって言うてました。私が来るのも分かっていたみたいで・・・」

「彼女と会話したの?!他になんて?」

「もう介入してくるなと・・・介入すればあの男のようになるって・・・」

「あの男・・・？」

と、その時・・・

「研究長！！大変です！岩乃さんが！！」

その後、ゾフィの秘書ニーナが告げたのは、岩乃の死だった。

〈第16夜 境界〉

岩乃は屋上から転落して死んだらしい。屋上にあるフェンスは岩乃が転落した所だけ何故か変形していた。岩乃がやったのだろうか・・いや、一人の人間が出来るものではない。もっと他の何かが・・。

そのフェンスの傍にはタバコの吸殻が落ちていた。その事と、岩乃の性格からして自殺というのは考えられない。

やっぱり歌夜が・・・？

その後、一人ホテルに戻った弥娜は色々と考え、そして悩んでいた。ゾフィにはもう一度、夢に潜ってほしいと頼まれたが、死者が出ている為に、自分や弟に被害が及ぶ可能性もある。尚樹の安らかな寝顔を見て、弥娜は、ため息をついた。その時、

「お姉ちゃん・・・」

尚樹が弥娜の名前を呼んだ。寝言だと思いながら弥娜はもう一度、尚樹の顔を見た。それは確かに寝言だったが、どこか様子が変だ。尚樹は寝たまま、更に喋り続けた。

「嫌がつてるから・・・潜っちゃいけない・・・やめて・・・」

「尚樹・・・？」

「何を悩んでいるの？潜らないでと・・・言ったはずよね？」

弥娜の背後で声がした。弥娜が振り向くと、そこには、あの時出会った少女が立っていた。

「伽代なの・・・？イ・・・ヤ・・・駄目！弟には・・・尚樹には手を出さないで！！」

伽代は首を横に振った。

「私じゃないわ・・・多分、華世がやってるのよ。私は様子を見に来ただけだもの・・・。」

「華・・・世・・・？だったら止めてよ！やめさせて！！」

「無理よ。それは歌夜自信の意志だもの。」

「そんな・・・でも貴女は・・・！」

「・・・ただ、一つだけ方法があるわ。その子の夢に潜るのよ。」

伽代の口から、夢に潜る、という言葉聞くのは弥娜にとって意外な事だった。それでも弥娜は弟を助けるために弟の手を握った。

夢に潜ろうとした時、伽代が弥娜に声をかけた。

「その子の夢は今、歌夜とつながっているわ。だから私も簡単に来れた。それと華世は、甘くないわ。油断しない事ね。」

「何故・・・貴女は私に色々な事を教えてくれるの？貴女は・・・」

「さあ、何でもでしょうね。でも歌夜は・・・貴女の事を・・・」

そう言つて伽代は消えた。まるで何か別の力に掻き消された様だつた。そして、弥娜も引きずり込まれる様に尚樹の夢に潜つていった。

く第17夜 修羅く

弥娜が目をあけた時、足元には無数の死体が散らばっていた。

そして、その中心に一人の女性が佇んでいた。着物は返り血を浴び紅く染まり、手には二本の日本刀を持っている。

「来たわね……。」

その女性は弥娜を見詰め微笑んだ。

「華世ね……弟は何処？」

「貴女の足元よ。」

弥娜の足元には尚樹の死体が転がっていた。

「尚樹!!」

「死んでないわ……現実ではね。でも精神崩壊くらいは起こしてるかも。」

華世は嬉しそうに、また微笑んだ。

「まさか……岩乃さんも、貴女が……。」

「嫌ねえ。人聞きの悪い。大きな負の感情を持つ人間は、時として霊的力を発揮する事があるの。私はただ、その人の後押ししただけよ?」

「負の感情を持つ人間・・・？」

弥娜の様子をみて笑う華世を弥娜も負けじと睨んだ。

「うふふ・・・私が憎いの？」

華世は持っていた日本刀の片方を弥娜に投げ渡した。

「だったら私を殺しなさい。どうせ私は死ななければならぬのだし。いつもは自分で自分を殺してきたけど・・・他人に殺させるのも面白いわよねえ。」

そう言うとき華世は刀を突き立てて弥娜に向かって襲いかかってきた。弥娜はとっさに刀をかざし受け止めた。

「貴女は・・・何が目的なの？」

「目的？私が死ぬこと。または貴女を殺すこと・・・私はどちらに転んでも構わない！！」

華世は様々な方向か角度を変えて襲いかかってきた。

華世が持つ鉄の刃が幾度となく弥娜の肌を紅く染めた。それでも弥娜は必死に避けた。

死にたくはない。もちろん殺したくもない。

「アハハハハ！楽しいわね！そんなに死にたい？殺らなきゃ殺られるのよ？私はまだ掠り傷一つ無いわよ！！」

それでも弥娜は刀を華世に向けようとはしなかった。

否、向けられなかったのだ。今の弥娜は避けるのが精一杯であり、攻撃する余裕など、どこにも無かった。殺らなければ殺られる、結局それが現実であった。

イチかバチか・・・

弥娜は向かって来る華世にむけて刀を翳し目を閉じた。鈍い音と共に弥娜の手が紅く染まった。華世の血だ。弥娜はそっと目あけた。華世の姿は何処にも無く、周りの景色も無くなり闇が広がっていた。そこに残されたのは、弥娜と、尚樹と、もう一人・・・

〈第18夜 真実〉

「伽代!!」

そこには伽代が立っていた。悲しそうな目で尚樹を見詰めている。

「ごめんなさい・・・私の妹のせいで・・・」

「妹？貴女は何者なの？」

「私は伽代。歌夜より先に生まれて先に消え、歌夜の中に存在する
霊魂・・・。」

*

今から22年前

伽代は四条家の長女として生まれた。母は伽代を溺愛していたが、伽代は3歳で交通事故に遭い死んでしまった。

その翌年に生まれた子に母は伽代と同じ響きを持つ名をつけた。これが歌夜である。

母は歌夜を呼ぶたびに伽代を思い出し哀しんだ。

その結果、伽代の霊魂は、この世から離れられず、さ迷い続けた。また、歌夜はそんな母を見て育ったため愛情を感じる事が出来ず、常に寂しさと孤独の中に居た。

歌夜は幼い頃から日常に満足できず、そのまま17歳まで育ち、あ

の日から長い眠りについた。

歌夜は夢の中で生と死を繰り返し、生きる意味を掴もうとしていた。そして、そのために生み出した最初のもう一人の自分が伽代である。自分でもあり憎き姉でもある‘伽代’。

歌夜は伽代を殺し、自分の中から消し去ろうとしたが、それが逆効果だった。伽代という名は、この世をさ迷っていた伽代を捕え、伽代を歌夜の夢の中に封じ込めてしまったのだ。

その後、弥娜が夢に介入してきた。伽代は妹を庇い弥娜を夢から追い出していたが、弥娜に敵意が無い事を知り、妹の為に状況の改善を望み、弥娜に協力するようになったのだ・・・

*

「そんな・・・歌夜の姉だなんて・・・」

「信じられないかもしれないけど私の精神は夢の中の伽代と融合し成長しているのも事実よ。」

尚樹が苦しそうに弥娜の名前を呼んだ。生きている。

「その子を貴女の実家に送りなさい。貴女のおばあさまなら何とか出来るかも・・・。」

弥娜は頷いた。

「一つだけ教えて。何故、貴女は私の事を色々と知ってるの？私の・・・」

伽代の姿が消えた。

「それは・・・全ての‘夢’は繋がっているから・・・。」

頭上から聞こえてくる声はとても優しくかった。安心を齎す声・・・しかし嵐の前の静けさの様な・・・。

「お姉ちゃん・・・。」

もう一度、尚樹が弥娜を呼んだ。

〈第19夜 忘却〉

「お姉ちゃん!!」

目が覚めた時、尚樹は祖母の家にいた。

悲しい夢を見ていた。姉が自分を助けてくれて、彼女はそれと引き換えに命を落とす・・・考えたくないような夢だった。

あれ？

姉の顔が思い出せない。姉の声も。はたして自分に姉などいたのだろうか・・・そんな気持ちになる。

「目が覚めましたか・・・尚樹。」

祖母が部屋に入ってきた。

「ねえ、俺は何でここにいるの？」

「友達と遊んでいて貧血で倒れて、ここに運ばれたんです。」

何かが違う気がした。しかし、何が違うのか自分でも分からない。

「お姉ちゃんは？」

それを聞いて祖母はクスツと笑った。

「何を寝ぼけているんです。尚樹は一人っ子でしょ。」

ただの夢か・・・

祖母に言われたら認めざる負えない。そう、全てはただの夢だったのだ。

「昼食が来ていますから起きて食べなさい。」

「うん！」

今までの事など忘れ、尚樹は廊下を走っていった。その姿を祖母は悲しそうに見つめ涙を流した。

「姉の事など忘れて幸せに暮らさない・・・。貴方の姉は・・・もうすぐ・・・。」

〓〓研究所〓〓

「それで・・・歌夜の中には姉が？」

「はい。」

「そう・・・姉がいたなんて初耳ね。」

ゾフィはそう言うため息をついた。自分の調査不足に対して、だ。

窓の外を見るゾフィの目は何故か悲しそうで・・・まるで何かに怯えているようだった。

「今日はもう部屋に戻りなさい。貴女も疲れてるだろうし・・・私も・・・ね。」

部屋から出て行く弥娜を見送り、ゾフィは一人部屋に残って窓の外を見た。

「貴女を見ていると不安でならないの・・・」

く第20夜 焦燥く

ゾフィは、焦っていた。

研究の成果だつて、もうすぐ出そうなのに、あんな事を誰かに知られるなんて考えたくなかった。彼女の能力は正直恐ろしかった。このままではバレるかもしれない、いつもそんな事を考えていた。

*

煙草を吸いながら屋上に居る岩乃。フェンスに寄りかかって此方を見ている・・・

「なあ、研究長・・・やっぱりあの子の夢をぶち壊して早々とこの研究を終わりにした方がいいんじゃないッスか？」

「何を言ってるの？彼女の一族の掟に反するでしょ？」

それを聞いて岩乃はニヤリと笑った。

「研究長・・・本当はあのガキの掟やら何やらはどうでもいいんですよ？」

「なっ・・・何を言っているの？」

「アンタは自分の研究の事しか考えてない・・・違うか？だって、そつだろ。あんな危険な現象が起きてるのに、この期に及んで人を呼ぶか？普通。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「それとも、これを期にあの一族の研究もするつもりか？」

「・・・・・・・・黙りなさい。」

「結局、研究第一ってことなんじゃねえのか？」

「黙れ！！！」

ゾフィの発した言葉は、何故か大きな力となってフェンスを捻じ曲げた。バランスを崩し落下しそうになる岩乃。それでも、落ちまいと必死にしがみついていた。

「うわああああ！」

「そうね・・・確かに私は研究の事しか考えてないわ。だけど、それが何？」

ゾフィの後ろに、あの少女が立っていた気がしたが、岩乃の思考は長くは持たなかった。

ズルッ

落下する岩乃。下から微かに声が聞こえた。

「あのガキも用が済んだら俺みたいにするのかよ・・・研究長・・・」

＊

思い出したくもない忌まわしい過去。だけど彼女の能力は私の過去をも暴くかもしれない。

出来れば、研究が終わったと同時に彼女には、岩乃の様な不幸な事故で死んでほしかった・・・

〈第21夜 崩壊〉

尚樹が去ってから弥娜は研究所の一室を与えられ、そこで生活をするようになった。

狭くて殺風景な部屋には生活に必要な最低限の物しか置いていない。弥娜はベットに腰かけ、ため息をついた。

足りない……

部屋の中を見て弥娜はそう思った。弥娜にとって一番必要で、大切な存在である尚樹はもうここにはいない。唯一の心の支えである尚樹が居ない今、弥娜の心にはポツカリと穴が開いたように、物足りないと感じる様になっていた。

歌夜はどのくらい深い絶望の中にいたんだろう……

ふと、そんな事を考えながら弥娜は眠りについた。

*

「姉さん……居たの……？」

「ええ。」

「なぜ……何故、私の中に？けし……消したはずなのに……
イ……イヤ……」

「・・・・・・・・・・。」

「イヤッ・・・幻よ・・・こ・・・これは・・・」

ザンッ！！！！

景色が赤く染まった。

*

「！！！！！！」

血なまぐさい夢を見て弥娜は目が覚めた。暗い部屋の中を時計の弱々しい光が照らしている。それでも部屋の中は暗い。時計は午前2時をさしていた。弥娜は枕元に手をのばした。

たしか、この辺に水さしとコップが・・・

パシッ

突然、誰かに手を掴まれた。突然なことなので声も出ない。

「どう？独りになった気分は？」

そこには1人の少女が立っていた。

年は5〜6才くらいで、背は低く白いワンピースを着ている。何故かこの暗闇でその姿ははっきり見えた。

生霊・・・なの？

「貴女は・・・？」

「私はね、花与っていうの。どう？孤独の中にいる気分は・・・変える場所を失う気分は？あはっ」

「どういう事・・・？」

花与は弥娜の腕を思いつきり引張った。

「何にも知らないのね。みせてあげるわ。」

く第22夜 記憶く

目の前には見慣れた光景が広がっていた。見慣れた部屋。

ここは・・・おばあちゃんの家？

その部屋には一人の少年が寝ていた。
隣には祖母が座っている。

尚樹！！！！

祖母は尚樹の額に手をあてた。

「夢見沢尚樹には夢見沢弥娜などという姉の存在は無い。全ては夢、
幻。」

あ・・・あれは・・・

「夢見沢尚樹には姉と過ごした記憶など一切無い。」

言霊の実体化！？

言った言葉を現実にするのが、‘言霊の実体化’である。この術から
抜け出すのは同じ術者でも難しい。ましてや一般人では・・・。
その後、尚樹は姉の事など、その存在すら忘れ、部屋から出ていっ
た。

「そ・・・ん・・・な・・・。」

弥娜の目から涙が溢れた。

「まだだよ……。これだけじゃないんだからね」

*

無の中に二人の少女が立っていた。同じ顔、同じ髪型。

「姉さん……。居たの？私の……。私だけの世界に。」

「ええ。」

「何故なの！四条伽代はとくに死んでるじゃない！！！」

「そうね。」

「なぜ……。何故、私の中に？けし……。消したはずなのに……
イ……。イヤ……」

「……………」

「消したわ……。こんなの嘘よ……。」

「嘘じゃないわ。貴女は常に誰かを求『うるさい！！！！』」

「イヤ……。嫌なの……。自分以外の世界なんて……。誰も……」

「その思いこそ嘘なのよ……」

「イヤッ・・・幻よ・・・こ・・・これは・・・」

ザンッ!!!

景色が赤く染まり、二人の姿が消えた。

＊

「分かったかな？貴女は独りなんだよ？」

〈第23夜 聖裁〉

弥娜はその場にガクリと膝をついた。目から涙が溢れ、零れ落ちる。そんな弥娜を見下ろしながら花与はさらに追い討ちをかけるかのよう言葉が続けた。

「世界は冷たいの……。私たちを簡単に捨てるわ。信じていいのは自分だけよ……？」

「……………」

「貴女も眠りなさい。闇の中で、自分だけの世界で生きるといいわ。」

「私は……………」

「？」

「私は確かに独りかもしれない……。けど、私は世界に捨てられても、私は世界を捨てない！！！」

「私が世界を捨てたんじゃない、世界が私を捨てたのよ……。」

花与の顔には怒りと、そして悲しみが表れていた。

「貴女も私も同じ立場……。だったら貴女が目覚めてくれたら、私は独りではなくなるのに。」

弥娜の言葉に花与の表情に困惑の色が表れた。

「何故・・・？貴女といい姉といい何故なの？私を捨てた世界の一部のくせに！！！」

＊

「夢か・・・」

弥娜は目覚まし時計の音で目を覚ました。あわてて時計を止める。ふと、手首に目をやると花与が掴んだ痕がくつきりと残っていた。

＊

深い闇の中に花与の死体があった。生まれては死ななければならぬ世の理。

花与の死体の側に一人の少女が立っていた。

17歳。四条歌夜。学生服を身に纏い、眠りについた時のまま。

歌夜はそつと花与の死体を抱き上げ、そして抱きしめた。

「結局・・・生と死を繰り返しても何も・・・生きる意味は分から

なかった・・・」

花与の死体が手の中で消える。

「自分だけの世界は自分だけ・・・独りだもの。」

歌夜の足元には今までの“カヨ”達の死体が転がっていた。

「外の世界に出るのは辛いわ。けど・・・あの子なら信じていいかも・・・だから私は・・・。」

突然、歌夜の表情が変わった。

「人は裏切るのよ・・・信じていいのかしら？それに今さら外に出るなんて私のプライドが許さない！！」

もう一人のカヨ。歌夜は心の奥底から自分の望まないカタチでもう一人の自分を生み出してしまった。

・・・つまり歌夜は深い眠りの中で二重人格になってしまったのだ。

「死をもつて生きる意味を知りたいなんて・・・莫迦ね。」

もう一人のカヨは声をあげて笑った。

「私の邪魔をするなら、私自身でも許さない。」

カヨは手を上げ思い切り振り下ろした。

「消えなさい、誰もかれも！！」

暗闇にヒビが入り、歌夜の世界が崩れはじめた。

〈最終夜 希望〉

一方その頃研究所は揺れていた。壁や天井が崩れる中、ゾフィは逸早く研究所から逃げ出していた。

研究は大事だか、命の方が大切だ。必要な書類だけを持ち、仲間を捨て、研究所から脱出する。

ゾフィにとって仲間などは二の次の存在でしかなく、研究の方が・
・即ち自分の利益が一番なのだ。

自分より研究の成果をあげていた弥娜は研究に必要な道具でしかなかった。

しかし、憎かった。自分より年下の、ただの小娘が研究の成果をあげているなど認めたくなかったし、許せなかった。だからこそ見捨ててきたのだ。彼女を殺して手柄は自分のものにしよう・・・・。
そんなゾフィに聖裁を下すように、玄関の柱が折れ、ゾフィの上に倒れてきた・・・・

*

研究所内はパニック状態だった。立ってられない程の揺れ、逃げ出すのに精一杯な状況だった。周りの人が次々に逃げ出す中、弥娜は一人、歌夜の傍に近寄った。

「私は、見捨てないから。」

歌夜を連れて逃げようと思い、その手に触れた時、歌夜がうつすらと目を開け弥娜を見つめた。

「歌夜……？」

「あなたは…あなたは逃げないの？」

歌夜の問に弥娜はコクンと頷いた。

「うん。一緒じゃなきゃイヤだ。」

次の瞬間天井や壁が崩れ、全ての通路が塞がり、逃げられない状況になってしまった。

「有難う……」

歌夜の目から涙が零れ落ちた。と、同時に歌夜の表情が豹変した。

「裏切らず、ずっと一緒に居てくれる？」

もう一人のカヨ。

弥娜は歌夜の手をギュツと握った。

「私は裏切らないし、どんな“歌夜”も受け入れる……。だから……だから、ずっと一緒にいようね……」

歌夜の表情が笑顔に変わる。その直後、天井が崩れ二人の上に落ちてきた……

*

「お姉ちゃん？」

遠く離れたところで、居る筈のない姉を尚樹が呼んだ・・・。

END

〈最終夜 希望〉（後書き）

あとがき

いかがだったでしょうか？

よりシリアスに、高度な展開を目指してみたんですが。

授業中に仕上げるという荒業をやったにも関わらず、自分では結構気に入っています、この作品は。

ラストを、あえてあのようなオチにしたのはそれなりの理由があります。

続きは読者に考えて欲しいからです。

あのまま自己の中で完結させてもよし。
あるいは、尚樹のその後とか考えてみても楽しめるんじゃないでしょうか？

結末は1つでなくてもいいんです。

納得がいくも、いかずも貴方次第。

私としては納得いかないままモヤモヤと心にとどまり続けてくれれば嬉しいのですが（笑）

最後までこの作品を読んでくださり有難うございました。
評価の方をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3721c/>

夢見姫 墮落の少女

2010年11月14日09時41分発行